



▲津波の直後、漂流する船を瓦礫が取り囲む。(志津川湾内)

写真提供 南三陸町社会福祉協議会

国道 45 号を気仙沼方面に北上した町境近くにある港は、外洋から入る波を遮るような深い入り江になっており、まさに天然の良港だ。普段は沖に白波が立っていても、港は別世界のように穏やかだ。

漁師たちの間では、津波から船を守る手段として、潮位の変化が始まる前に、津波の影響が少ない沖合まで船を出す「沖出し」が行われてきた。東日本大震災のその日も、漁師の及川征記さんと阿部克樹さんは、激しく潮が引く中、入り江をギリギリで脱出し、津波の巨大なうねりをなんとかかわしながら、必死で船を沖出した。

しかし、しばらくすると、沖には家の屋根やらガスボンベなど、様々なものが流れてきて身動きできないまま、夜になってしまった。及川さんたちは仲間たちと 4 艘の船を、大破した養殖施設の残骸に係留し、次々と流れてくる漂流物が船にぶつからないように押しやりながら、ひたすら夜が明けるのを待った。常に転覆する危険と隣り合わせの恐怖の中で、ひとときも心休まることはなかった。時折、発電機を回しライトで周囲を照らし出すと、1 時間毎に同じ家の屋根が流れてくるのが確認できた。瓦礫混じりの濁流が、恐ろしい勢いで大きな渦を巻いていた。

船の沖出しはいかに危険を伴うことなのかを二人は身をもって体験した。「大きな津波の時には沖出しはすべきではない。船より、自分の命を守る行動が何より大切だ」と、死と隣り合わせの一夜を経験した二人は語っている。